

10:1 イエスは十二弟子を呼び寄せて、汚れた霊どもを制する権威をお授けになった。霊どもを追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやすためであった。

10:2 さて、十二使徒の名は次のとおりである。まず、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼバダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、

10:3 ピリポとバルトロマイ、トマスと取税人マタイ、アルパヨの子ヤコブとタダイ、

10:4 熱心党员シモンとイエスを裏切ったイスカリオテ・ユダである。

10:5 イエスは、この十二人を遣わし、そのとき彼らにこう命じられた。「異邦人の道に行ってははいけません。サマリヤ人の町に入ってははいけません。

10:6 イスラエルの家の失われた羊のところに行きなさい。

10:7 行って、『天の御国が近づいた』と宣べ伝えなさい。

10:8 病人をいやし、死人を生き返らせ、ツアラアトに冒された者をきよめ、悪霊を追い出しなさい。あなたがたは、ただで受けたのだから、ただで与えなさい。

10:9 胴巻に金貨や銀貨や銅貨を入れてはいけません。

10:10 旅行用の袋も、二枚目の下着も、くつも、杖も持たずに行きなさい。働く者が食べ物を与えられるのは当然だからです。

10:11 どんな町や村に入っても、そこでだれが適当な人かを調べて、そこを立ち去るまで、その人のところにとどまりなさい。

10:12 その家に入るときには、平安を祈るあいさつをしなさい。

10:13 その家がそれにふさわしい家なら、その平安はきっとその家に来るし、もし、ふさわしい家でないなら、その平安はあなたがたのところに戻って来ます。

10:14 もしだれも、あなたがたを受け入れず、あなたがたのことばに耳を傾けないなら、その家またはその町を出て行くときに、あなたがたの足のちりを払い落としなさい。

10:15 まことに、あなたがたに告げます。さばきの日には、ソドムとゴモラの地でも、その町よりはまだ罰が軽いのです。

10:16 いいですか。わたしが、あなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい。

10:17 人々には用心しなさい。彼らはあなたがたを議会に引き渡し、会堂でむち打ちますから。

10:18 また、あなたがたは、わたしのゆえに、総督たちや王たちの前に連れて行かれます。それは、彼らと異邦人たちにあかしをするためです。

10:19 人々があなたがたを引き渡したとき、どのように話そうか、何を話そうかと心配するには及びません。話すべきことは、そのとき示されるからです。

10:20 というのは、話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあって話されるあなたがたの父の御霊だからです。

10:21 兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子どもたちは両親に立ち逆らって、彼らを死なせます。

10:22 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人々に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。

10:23 彼らがこの町であなたがたを迫害するなら、次の町にのがれなさい。というわけは、確かなことをあなたがたに告げるのですが、人の子が来るときまでに、あなたがたは決してイスラエルの町々を巡り尽くせないからです。

10:24 弟子はその師にまさらず、しもべはその主人にまさりません。

10:25 弟子がその師のようになれば十分だし、しもべがその主人のようになれば十分です。彼らは家長をベルゼブルと呼ぶぐらいですから、ましてその家族の者のことは、何と呼ぶでしょう。

はじめに

毎月、聖餐式に与る前にマタイの福音書のシリーズを学んでいます。

このシリーズでは、マタイの福音書に記された五大説教を取り上げています。

各説教を明確に区別できるのは、マタイが福音書の構成で区切りをつけてくれているからです。これまでで、マタイ 5-7 章に記された「山上の説教」と呼ばれるひとつめの説教については学びを終えました。

次に学ぶのは 10 章に登場するイエスが弟子たちを派遣される場面です。この教えは本日と次回 4 月 7 日の 2 度にわたって学びます。

五大説教のふたつめにあたるこの個所は、イエスが弟子たちを最初の宣教の旅へと送り出す前に語られた教えです。

過去 24 年間で、私はカナダと米国からの宣教チームを 12 回受け入れた経験があります。

宣教旅行のために十分訓練を受けて準備し、宣教旅行の意義に心を集中できたチームは、大いに祝福を受け、成果を挙げました。

ですから、宣教旅行に準備と訓練が大切なことは私自身よくわかっています。

イエスは、準備と訓練の重要性、そして権威を与えることの重要性をご存知でした。

私が受け入れたグループの中でもよく覚えているのは、寸劇を披露した後、リーダーが必ず「福音のメッセージを分かりやすく伝えられていましたか」と確認してきたチームです。このチームはそれまでで一番よかったチームです。

18-21 歳の男女のチームで、歌や寸劇、チョークアート、証などをおして福音を提示できるよう、しっかりと訓練されていました。

これから私たちはマタイ 10 章を学びますが、この学びから私たちもとくにこの春日本にいる人たちに福音のメッセージを分かち合う備えができるようにと願っています。

今日の個所を学び始める前に、今日の個所の直前の個所に注目しましょう。

マタイ 9 : 35-38

9:35 それから、イエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやされた。

9:36 また、群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかawaiiそうに思われた。

9:37 そのとき、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。

9:38 だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。」

この個所で注目すべきことが 3 つあります。

1. イエスは、人々をあわれんでおられました。彼らは、羊飼いのいない羊のようでした。
2. イエスの教えは、奇跡によって確証づけられました。
3. イエスは弟子たちに、収穫のために働き手を送ってくださるよう神に祈りなさいとおっしゃいました。

今日の個所は、ある意味、この祈りに対する答えであり、福音のために働く人たちを備えるための教えです。

1. イエスが具体的な目的のために弟子を選び、権威を与えられた。(10 : 1-6,8)

1-4 節ではまず、宣教の旅に送り出された 12 使徒の名をマタイが挙げています。

また、イエスが彼らに、汚れた霊を追い出し、病気を癒やす力を与えられたと語ります。

このような使徒は教会にもういないということが重要なポイントです。

というのも、彼らは特定の働きのためにイエスによって召され、権威を授けられたからです。

当時は、福音のメッセージが本物であることを証明するために、使徒たちが特別な力を持つことが必要だったので。

つまり、福音が真理だと証明するということです。

イエスご自身も、神の御国のメッセージが信頼に値することを証明するために、同じように奇跡を行われました。

そして、主の働きを広めるために、イエスは助けを必要としておられました。

イエスはまもなく、死んで、死からよみがえり、天へ帰られるからです。

その後、イエスは信徒全員にイエスの証人となるための力を授けるべく、聖霊を送ってくださいます。

当時の人々にとっては、奇跡を行えることが必要だったのです。

現代の私たちにとっては、おもに聖霊が神のみことばを用いて人々に罪を示し、赦しの必要性を気づかせてくださいます。

神は病気を癒やしたり、死人をよみがえらせたりしてくださるかもしれませんが、それは主権者なる神のみこころのままに行われることです。

一方、現代の私たちに対して宣教についてイエスが命じられる内容は、マタイ 28 : 18-20 に記されています。

マタイ 28 : 18-20

28:18 イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。

28:19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受け、

28:20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

大宣教命令は、「弟子を作る」「バプテスマを授ける」「みことばを教える」だということに注目してください。

これが現代の私たちが焦点を置くべきポイントです。

私たちが大宣教命令に従っている中で奇跡が起これば、神をたたえましょう。けれども、体の癒やしの奇跡がおもな働きではありません。

最大の奇跡は、私たちが新生し、神の聖霊を受け、死んだときに天国に行けることです。そして、いつの日か、私たちの体が死からよみがえり、完璧な世界に住めるということです。

現代の教会指導者が持つべき資質については、すでにテモテ第一 3 : 1-13 で学びました。これらの資質は、内面の性質であり、聖霊があふれ出ていることです。

これらの資質に、奇跡を行う能力は含まれていません。

ヨハネ 20 : 24-29

20:24 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった。

20:25 それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と言った。

20:26 八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って「平安があなたがたにあるように」と言われた。

20:27 それからトマスに言われた。「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」

20:28 トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」

20:29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」

トマスは、復活のイエスを自身の目で見ました。

けれどもイエスは、復活のイエスを見たことがなくても聖書のメッセージを信じる人が幸いであるとおっしゃいました。

それは、現代の私たちのことです。

5-6 節で、イエスは弟子たちに、異邦人やサマリヤ人のところに行って福音を伝えないようにと明言されました。

弟子たちが行ってよいのは、イスラエルの家の失われた羊のところだけでした。

イエスは対象者を特定しておられました。この時は、ユダヤ人だけに教えを語ろうとしておられました。

異邦人に福音のメッセージが伝えられるようになったのは、後になってからです。

ヨハネ 1：11-13

1:11 この方はご自分のくじに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。

1:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

1:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。

2. イエスは、福音の支持者をとおして、福音の働き人に備えを約束された。(9-15 節)

イエスは弟子たちに、衣食に関して完全に神を頼るようにと命じられました。これは、完全な信仰による宣教旅行です。

けれども、彼らの宣教旅行を支えなければならなかったのは、同行した弟子たちでした。

現代でも、このようなかたちで宣教師を支援する方法は存在します。

現代の宣教師や伝道者は通常、福音を支援する支援者からサポートを受けます。

過去には教会が宣教師を経済的に支援していましたが、現代では宣教師や伝道者の 9 割が、福音の働きを支援する個人によってサポートを受けています。

これらの支援は、私たちが通う教会への什一献金をささげたいうえですべきです。それが聖書の教える方法だと私は信じています。そのようなかたちで支援するのは犠牲が伴いますが、私たちがそうすることで神が大きな働きを成してくださいませ。

神が誰かを福音の働きへと召されるとき、必ず備えもしてくださいませ。

30 年以上前になりますが、私がフェイスミッションバイブルカレッジの学生だったときに、経済的な必要について神を信頼することを学んでいなかったなら、働き人として長くは続かなかったでしょう。

働き場として神が導いてくださったところで、私は毎回、経済的な必要を神が満たしてくださいませと信じなくてはなりません。

すばらしいことに、神はほとんどの場合、福音の働きに心を向けて祈ってくださっている人をとおして必要を満たしてくださいませました。

先週、30 年以上前に妻のウェンディに起こった出来事を思い出しました。

私たちはスコットランドのエジンバラの郊外にあるダルキースという町に住んでいました。

当時私はバイブルカレッジの学生で、ウェンディは 2 歳だった息子アンドリューの世話をしていました。

ですから、収入は一切なく、信仰によって暮らしていました。

この出来事が起こる数か月前、神が車のガソリンを与えてくださるように信じてみたらと、ウェンディが私に言いました。そのとき、ガソリンはほぼ空っぽでした。

神は不思議な形でお金を与えてくださり、私はガソリンを満タンにすることができました。

次はウェンディの番です。家にお金が 1 ポンドしかありませんでした。日本円なら約 140 円です。

ウェンディはスーパーに買い物をしに行かなくてはなりませんでしたが、1 ポンドしかなかったもので、それではパンしか買えません。私は家に残って祈ることにし、ウェンディが 1 ポンドを持ってスーパーに行きました。

スーパーに着いたウェンディは、何を買おうかと悩みました。

すると突然、ひとりの女性が近づいてきて 5 ポンドをウェンディに手渡したのです。

30 年前ですから、6 ポンドあれば 3-4 日分の食料が買えます。

ウェンディは喜んで帰ってきて、その話をしてくれました。

その女性が誰だったかウェンディに尋ねると、最近行きだした教会の人だったかもしれないということでした。後から、そのとおりだったことがわかりました。

その時から、この女性はご主人といっしょに夫婦で私たちのために祈り、支援してきてくださいました。

数週間前、その女性から悲しい知らせが届きました。メールには、彼女がガンで余命わずかだとありました。ご主人は教師の仕事で退職したところです。そして、ふたりの子どもさんとお孫さんも数人います。

ご家族は悲しまれるでしょう。けれども、天国に着いたら、彼女は福音の働きのためにささげた報いを受けるのです。私はこの女性のことを神に感謝しています。このような人々のおかげで、世界中で福音の働きを続けていけるのです。

3. イエスは、神の方法でなされる福音の働きは必ず反対に遭うとおっしゃった。(16-23節)

まず、教会の交わりに入っていない世間の人々は、クリスチャンが教会の中だけで信仰を実践していれば満足です。

クリスチャンが教会の中にとどまっていたり、福音を携えて外に出ていかなければ、反対に遭うことはありません。

けれども、クリスチャンが宣教の大切さを真剣に受け止めて、地域の人々や職場の人々に福音を語ろうとすると、反発が生まれます。

福音を分かち合うために出かけるときに霊の戦いがあることを理解していなければ、簡単にあきらめてしまうでしょう。

日本ではとくにそうです。

けれども、桜の季節に私たち教会が出かけていくときには、蛇のようにさとく、鳩のように素直でなければなりません。

桜の季節に大阪城公園に出かける予定ですが、そこではふたつの理由で監視員に活動を止められる可能性があります。

ひとつめの理由は、誰かが私たちのことで苦情を言った場合です。そのときは、場所移動を求められます。次に、私たちが無許可で販売活動をした場合です。こういうわけで、私たちが配布するものはすべて無料なのです。

歌を歌ったり、トラクトを配ったり、希望者にはプロの漫画家がマンガ似顔絵を描いたりします。

福音に反発する人たちからはあらゆる反対が起こるでしょう。ですから、私たちは規則や日本の法律を破ってさらに問題を大きくしないようにしています。

桜の季節には、教会からたくさんの方が大阪城公園に行き、福音を分かち合えることを願っています。

そのときには、蛇のようにさとく、鳩のように素直でなければなりません。

今ここにおられる方の中には、「何を言えばよいかわからないので、大阪城公園の伝道活動には参加できない」と思う方もおられるかもしれません。

その心配に、イエスが 19-20 節で答えてくださいます。

神の聖霊が言うべき言葉を与えて助けてくださると、イエスは私たちに語っておられます。

日本語の話せるクリスチャンなら、行かない言い訳はできません。日本語があまり話せなくても、心配しないでください。神が助けてくださいます。私も日本語はあまり話せませんが、神が助けてくださいます。

聖霊は、用いてもらうために自らを明け渡す器を探しておられます。

私たちが「福音のメッセージ」そのものではありません。私たちは福音を伝える「メッセンジャー」、つまり伝達者なのです。

キリスト教のトラクトを手渡すだけでも、将来神が用いてくださる種となり得ます。

4月7日に大阪城公園で予定されている伝道イベントにどうか参加してください。

今年も、世界的に有名な日本人の聖書漫画家をお呼びしています。

福音のメッセージに対する反発について教えるこの箇所を終える前に、なぜ人が福音に反発するのかを考える必要があります。

21世紀の現代社会では、人は何か話を聞くと、自分がその内容を気に入ったか、気持ちよく聞けたか、と考えます。

このような考えが、本来考えるべき「これは真理か」という問いを妨げるようです。

キリスト教が天国への唯一の道であると述べた途端に反発を受けます。

キリスト教は悔い改めのメッセージです。そこには、私たちの言動すべてにおいて神を第一とする変えられた生き方が要求されます。

イエスのために役立つ証人になるためには、聖霊に明け渡したクリスチャン生活を送らなければなりません。

人は聖書を読む前に、私たちの生き方を見るでしょう。

ですから、私たちは神のみことばに基づいたクリスチャン生活を送るよう気を付ける必要があります。

4. イエスは、私たちがイエスのようであればならないと教えられる。(24-25 節)

24-25 節で、福音の働きをする者は、イエスのようであるようにと促されています。当時の弟子たちは、イエスがどのように振舞い、どんなお方であったかを知っていました。

現代の私たちがお手本とするのは、聖書に記されたイエスです。謙虚にイエスに仕えている人たちも、もちろんその生き方をおして私たちに励ましてくれますが、イエスのように生きられるよう助けてくれるのはイエスご自身だけです。

宣教における真の犠牲はイエスのようになることです。イエスは謙虚さを示す究極の模範です。

ピリピ 2 : 1-8

2:1 こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあ、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、

2:2 私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。

2:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。

2:4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。

2:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。

2:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、

2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、

2:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。

イエスは、ご自身の栄光を手放して、処女マリヤの胎内で卑しい人の肉をまとわれました。

そして、明確な目的を持って神のみこころに完全に従われました。

その目的とは、世の罪のために罰を受けることでした。

すべては、私たちのような反逆者が赦しと永遠のいのちに与るためです。

本物のクリスチャンとなってキリストのようになるには、完全にへりくだって自分の人生を神にゆだねる覚悟が必要です。

神の目的のために神に用いていただくためです。

イエスのように生きれば、その証は力強いものとなります。

まとめと適用

イエスが 12 弟子を召して送り出された際の教えは、現代の教会にも時代を超えた真理を教えてください。これを、福音宣教の六大原則と呼ぶことができます。

1. 福音宣教の動機は、常にあわれみの心でなくてはなりません。また、宣教の手段は人と祈りです。私たちはあわれみの心を持ち、祈り、働く必要があります。
2. 福音を伝えるために私たちが偉い人である必要はありません。イエスに送り出された場所に行くだけです。

3. 福音を携える人は、福音をささげる人に頼ります。言い換えると、福音宣教の働きで仕えるようにと神に召されたなら、その働きを継続できるように、祈りと経済的な支援であなたを支える覚悟を持ってくれるたくさんの支援者が必要です。
4. クリスマンとしての私たちの品性は、イエス・キリストのための証です。私たちの生き方や、神が与えてくださる信仰による支援金の管理の仕方は大切です。
5. イエスと弟子たちが福音を告げ知らせたのと同じように、私たちも福音を告げ知らせなくてはなりません。福音のメッセージを薄めてはいけません。現代の考え方や文化に合わせて福音を変えてはいけません。聖書にあるとおりを伝えるのです。
6. 私たちの使命は危険で不和を生むものです。けれども、命をささげる価値のある働きです。イエスは私たちのために命をささげてくださいました。私たちも主のために命をささげる必要があります。私たちが人を救うことはできませんが、神の救いを伝える伝達者にはなれます。